

食用○○○○発見!!

風に運ばれ金木犀が香る季節になりました。

奈良山霊苑内や全国的にも、今年の長雨で“ナラタケモドキ”というキノコが多く発見されています。

このナラタケモドキはシメジやマイタケ等と同じ食用キノコで、特に東日本では“ポリポリ”と呼ばれ広く親しまれているそうです。

ツカの部分は繊維がしっかりしすぎて食べづらいのですが、カサの部分は一度茹でこぼしてから調理すると、とっても美味しく食べられます。



当苑で見つけたナラタケモドキ



食べると美味しいナラタケモドキですが、苑内の桜たちにとっては大問題。というのも、ナラタケモドキの菌に感染した樹木は葉量の減少等の症状が現れ、樹勢が衰退し、枯死に至る、という樹木にとってかなり重大な被害なのです。苑内でも、すでに2本の桜が枯死してしまい伐採しました。

健康な樹木ではあまり感染しない攻撃性の弱い菌のようですが、衰弱した樹木は感染しやすいそうです。

私達人間も体調が悪い時に、病気にかなりやすいのと同じで、樹木も一緒なんです。予防策は、人間と同じで健康な状態を保つこと、樹勢を回復させることが一番良いそうです。

~参考レシピ~

- ・お味噌汁
- ・お鍋の具
- ・炒め物
- ・炊き込みご飯
- ・煮物

当苑では十年後、二十年後にも桜たちがきれいな花を咲かせる事が出来るよう、菌に侵された根や切り株を掘削、除去し、桜たちの樹勢回復に取り組んでいく予定です。

ナラタケモドキの収穫は、夏から秋にかけて（特に長雨の後）が良いそうなので、来年は、キノコ狩りをして桜たちを守りたいと思います。もし、見つけた方はご自由にお採り下さい。

(でも、食べ過ぎには注意して下さいね！)



『フジグラン北宇和島店で!』

去る9月25日(金)~27日(日)の3日間、フジグランにて(株)山下石材の展示ブースを出店しました。初日には特設ステージで組合長の話、「お墓ってな〜に?」が2回行われました。普段から全国でセミナー講師をしている社長。

ユーモアを交えながらの興味深い話に「プロの方ですか?」との問い合わせも・・・(笑 違います)

また、ブースに展示してあった当社職人手彫りの一石五輪塔やお地藏様・メダカ鉢にも沢山の方が足を止めて感心しながら見入っていました。さすがお目が高いですね。隣に置いてあった中国物は一切スルーでした・・・。

相談コーナーではチラシを握って「〇〇さんの紹介で、お墓をお願いします」と来られたお客様もあり、忙しいながらも充実した3日間でした。ご来場頂いた皆様、本当にありがとうございました。

余談ですが、今回イベントに参加していたご当地アイドルグループ、「愛の葉ガールズ」と仲良くなれてちょっと嬉しかったです(笑)

文 (株)山下石材 専務 山下智恵

発行元：奈良山霊苑管理事務所
〒798-1351
愛媛県北宇和郡鬼北町奈良4230-1
電話番号 0895-45-0164
http://narayama-reien.jp
営業時間 9:00~17:00

手すりつきました!!

今まで気になっていた納骨室への階段に手すりがついて一安心です。

秋風が肌に心地よい季節となり、霊苑の木々にも秋の深まりを感じます。秋といえば、読書の秋・スポーツの秋ですが、皆さんは何の秋を満喫されていますか? 私は食欲の秋を満喫しています(笑)。だから痩せない。

私が出会った、樹木葬のお客様。パンフレットや資料で説明をする、「この樹木葬に決めたいわ。」

「この区画はここね!」

「事務所でパッと即決定!」

「え、あっ、実際に見に行きましょうよ。」

「霊苑でも「他所も見ただけど、やっぱりここが良いわ」と、嬉しいお言葉も頂きます。お会いして十分足らずでご契約となりました。」

「皆様との出会いに感謝!」

「出会いが待っているのかな。」

お墓参りへ行こう!

全国紙「月刊石材」という雑誌に、奈良山霊苑を掲載して頂きました!!

お墓の大切さを知ってもらいたい、沢山の人に伝えたい。管理事務所ではお墓セミナーを行っています。ご興味のある方は、ご参加下さい。

毎月第2木曜日 10:00~

玄米生活

玄米酵素とは、玄米、胚芽・表皮を麹菌によって発酵させた「手軽な玄米食」です。食改善をするには1年間続けるのがいいそうです。まずは、お試し下さい!

- 食物繊維がコボウの4倍!
- 消化吸収が良い!
- 健康に役立つ成分!
- カロリー控えめで栄養補給!

始めませんか?

※詳しくは管理事務所まで。その他商品もございます。

年間管理料について

平成27年度年間管理料を10月27日(火)にお引落しさせて頂きますので、口座確認の程、宜しくお願い致します。

尚、口座振替依頼書のご提出がお済でない方は、お手続きの程重ねてお願い申し上げます。

(用紙がない方は、管理事務所までご連絡下さい)



専務のコラム

「終活」について

昨年だったか、参加したお墓の勉強会の中で、東京大学名誉教授である養老孟司先生の書いたエッセー「そんな終活やめればいい」の紹介があった。

「終活」と言えば、2012年10月に41歳の若さで他界した流通ジャーナリストの金子哲雄さんが思い出されます。死期を悟った金子さんは、ご自分の通夜式の仕出し料理から葬儀一切を生前に打ち合わせ、参列者への会葬礼状まで用意していた事でご存知の方も多いでしょう。この金子さんの残された家族への愛情に感動した日本中の人々に「終活ブーム」が起こりました。

その昔、江戸時代にも自分の死後を徹底的に指示した人が居ました。かの本居宣長です。

自分の墓の絵を描き、墓石に「本居宣長之奥津城」と書けと指示し、柵をめぐらし、山桜を一本植え、枯れたら植え直せと。葬儀の時刻に棺桶を担ぐ順番まで指定していたとか。

人間、いつ死ぬやらわかりません。

実際、今ピンピンしている私でも5分後に交通事故で死ぬかもしれないのです。

残された2人の娘はおそらくパニックになり嘆き悲しむでしょう。(多分)

そこで、仮に私が金子さんや本居宣長のように

完璧なエンディングノートを書いていたらとしましょう。

娘たちは「さっすがー！お母さん！完璧やん！」と喜ぶでしょうか？

いやいや、この私の娘たちの事、おそらく七回忌法要ぐらいあたりに、

やっとエンディングノートの存在に気づき、

「お母さん、こんなもん書いとったわあ。もう遅いけど(笑)」と言うに決まっています。

前置きが長くなってしまいましたが、先の養老孟司先生のエッセーの結論部分の抜粋です。(独特な文章表現で難解なのですが…)

死んだ以上は、生きている人たちの問題に口を出す必要は無い。それがたとえ自分の葬式であっても、である。葬式は生き残った人たちのためであって、その意味では別に死者のためではない。

ただし二人称(家族等近い人)の関係にある人たちにとっては、死者は必ずしも死んではいない。むしろ「生きている」のが普通である。

だからこそ、一周忌・三回忌・うんぬん、と法事が続く。それによって二人称の死者は徐々に死んでいく。

もし二人称の関係がきちんと機能しているなら、死後の始末は家族に任せて当然であろう。

本人がどう思っているかは、家族が一番よく知っているはずだからである。

家族にも理解できない想いが仮にあったとしても。それは社会的には「ない」と同じである。

家族に理解できないくらいだから、他の誰にもまず理解出来ないはずである。そういうものは「ない」。

本人がいくら「ある」と主張しても、他の人にわからない以上は無いと同じだからである。

終活が盛んになる時、それが生きている時の二人称関係の不具合に起因するとすれば、決して好ましい事ではない。それは、死んでから片付ける事ではなく、生きている時に片付けるべき事なのである。終活が盛んだということを伝え聞くと、私はついそれを疑ってしまう。

ただでさえやかましい世間なのだから、せめて死んだ後くらいは黙っていてくれないか。